
Crying Flying Sun Shine

瓦斯灯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Crying Flying Sun Shine

【著者名】

ZZマーク

【作者名】

瓦斯灯

【あらすじ】

華の東京と言われ出てきてみればいつのまにか38歳になつていた中年が、東京の片隅で一人の少女と出会い、ちょっとだけ生きる強さを貰つお話し。

白い粉雪の降る灰色の街東京。

ここは、どこなのだろう。品川か。それとも新橋か。僕にはよくわからなかつた。

僕が立つてゐるこの道は、東京だといふのに、人ゴミはほとんど無い。

そこにいるのは、僕とそしてもう一人、あとは、くすんで錆びてゐる古い瓦斯灯とベンチだけ。

瓦斯灯の下にあるそのベンチ。

そこに座つてゐる少女は、とても綺麗だ。

線の細い左手でギターの柄を掴み、白色のピックをもつ右手は、弦を軽やかに弾いている。

ここは、灰色の街東京だ。

美しさとはかけ離れ、喧騒と欲望が渦巻く日本の首都だ。

だが、瓦斯灯が落とす冷たいコンクリートに広がつた暖かい檜円光切り取られ、それに包まれるよう、ギターを弾く少女は、何にも変えがたい美しさがある。

ああ、ここは東京ではなく。どこかの幻の場所なのだ。東京がこんなに美しいはずがない。東京はとっても汚い場所だ。

ふと、僕は気がついた。彼女は瓦斯灯の前でギターを弾いている。それはわかっている。

ただ、音が鳴つていないので。

確かに彼女のピックは、ギターの線を弾き、ギターの線もまた微かに震えている。

ああ、そうか。

そういえばそうそう。ギターというのはそれ単体だと音がとても小さいのだ。アンプという、いわば覚声機みたいな大きなスピーカーが無いと、十分に遠くまで聞こえない。

そこで初めて僕は、自分と彼女の距離がかなり離れていることに気がついた。

ギターの音を聞くために、彼女からおおよそ3メートルの場所まで近づいてみる。

ああ、やつと聞こえた。それはとても静かな曲だった。それは、いつかあつた遠いあの日、母親が歌ってくれた子守唄のよつな優しさを持っていた。

いつぶりくらいだろう。随分と穏やかな気持ちになる。

僕の地元では東京は、華の都とよばれていた。

東京にいけばどんな仕事にも就ける。裕福な生活を送れる。

そう、思っていた。

実際は、世の中そんなに甘くないわけで。なんとか都内の中小企業に就職したもの、これは不況の煽りと言うのだろうか。10年も働き続けたのにも関わらずあつさりとリストラ。

今は売れない3文小説家だ。一人食べていくのもままならず、当然、家族も養えず、妻は娘をつれて家を出て行つた。

あれから、幾度となく冷たい冬を過ごした。

そう、気づけば東京に来て20年。僕は38になつていた。

目の前にいる少女はどうなのだろうか。僕の拙い眼力に頼れば、17歳くらいだろう。

彼女にはまだ、たくさんの可能性が未来に残っている。比べて僕はどうだろう。

彼女のような輝きは、もはや失つてゐるよつな気がした。

彼女の手が止まつた。どうやら曲が終つたようだ。

静かな感動と、やすらぎを与えてくれた彼女に感謝を込めて、

ポンポンポンと3回手を叩く。

宴もたけなわか。この場を離れるのがとても寂しいが、もう夜も更けて結構な時間だ。

僕はきびすを返して家に帰ろうとする。

そうだ。家に帰ろ……ん、

なんだろう。少女が私をみて笑っている。ああ、素敵な笑顔だ。娘は大きくなつたかな。できれば、一目会いたいものだが。あれ、どうしたというのだ。

突然的な眠気が僕を襲う。物凄く眠い。

駄目だ駄目だ。家に帰らなくては。ここで寝てしまつては風邪をひいてしまう。風邪を……。

僕を見る少女は笑っていた。

少女の眼の下にある小さな泣き黒子。それが、大きくなつて、

僕の視界を覆う。

僕の世界は暗転した。

「おじさん」

そう呼ばれて、僕の意識が覚醒する。

「おーじさんっ！」

ああ、誰だらうこの声は。遠い日に聞いた娘の声か。

いや、違うだらう。この声は娘のものではない。これでも私は父親だ。少女の声がそうかそうではないかくらい、分かる。

「おーじさんっ！ 早くしないと沈んじゃうよー！」

沈む？ 何がだ。僕は何か沈んじゃいけない大切なものを持つていただろうか。

突然、僕が背中の下に感じていた冷たい床がぐらつと揺れる。そう、まるで沈むかのように。

「う、うわあ」

柄でもない声をあげて、僕は飛び起きる。ピチャーンと水が跳ねるような音が鳴つた。

「アハハハ、だから言つたのに。沈んじやうよつて
少女がニコニコ笑いながら僕を見る。それは、ああ。昨日の少
女だ。

そして僕は奇妙なことに気がついた。

それは、彼女が立つている場所だ。

それは、空の上。だつた。

当然、僕が立つているのも彼女と同じ空の上。僕が見上げても
空。見下しても空。四方を見ても空だつた。太陽の光がぼくらをま
ぶしく照り付けている。

どの空にも、必ず雲が存在する。それは、僕が住んでいた場所
でもそつだつた。そして、ここの中もそれは例外じやない。

私の下には、大きな入道雲が流れていた。

ここはどこだらう。僕はなんで、こんな場所にいるのだ。

後ろを振り返る。そこにはひとつのがびた、明かりの消えた瓦
斯灯。そして、下の空には、傾いたベンチが沈みこんでいる。

昨日の夜。僕は、東京のどこかで少女のギターの演奏を聞いて
いたはずだ。そして、演奏の終了とともにその場で寝てしまつたこ
とを思い出した。

どうやら冷たい床と感じていたのはあのベンチのことだつたらし
い。

「よかつたねつ！ 全部沈まなくて！」

僕の目の前に立つてゐるのは、まぎれもなく昨日のギター少女
だ。

「あ、ああ」

「もしねつ、あまま沈んじゃつと。おじさんはずつと帰つてこれ
ない人になつちゃつてたんだよつ！」

僕は自分が置かれてゐる状況についていてなかつた。自分は
なんて場所にいるんだ。あまりにも非現実的だ、この場所は。疲れ
て変な夢でも見てゐるのか。

「なあ、君。ここはどこなんだ」

「えつとねえー。」こはね、どこでもないよつー

「そうか」

少女の答えはちつとも要領を得ていなかつたが、なぜか自分はそれを受け入れた。

「君は、誰なんだ」

「んとねえー。私はね、きっとおじさんの大切な人だと思つよつー」

私の大切な人は、遠くへ行つてしまつて、僕の手には届かない場所へ行つてしまつた。彼女が私の大切な人ではないのは明白だ。彼女は私の娘でもないし、妻でもない。

私の娘には、彼女のような印象的な泣き黒子は無かつたし、妻にしては年齢が違ひすぎる。

「君はその、ずっとここに住んでいるのか」

「うんつー！ こいつやつて明るいときは空の上にいて、暗くなつたら下に降りてギターを弾くんだつー！」

そうか。僕は、君がギターを弾いているところにまたまた出くわしたのか。

「おじさんつー！ 安心してつー！ あのベンチは今は沈んじやつてるけど、夜になればまた元通りになるから。今はね、空が少しだけ悪戯しているのつー！」

少女は、ぴょんと飛んで私の前に着地する。彼女の靴が、下の空に小さな波紋を広げて、水が跳ねた。

「また、明日もずっと一緒にいられるねつー！ この世界は永遠だから、何にも心配ないんだつー。」

「そうか。そうだな。それもいいかもな」

東京にいるときの僕はただひたすら疲れていた。いつまでたつても光の見えない毎日。ただ生きることだけに自分の限りある時間を燃焼していた。

この場所が、そして昨日の場所が永遠なら、それはとても好都合だ。ずっと、安らかな気持ちでいられる。何かに対しても恨むこともなく、誰かを憎むこともなく、きっと僕はもうこれ以上疲れないと

でいいんだと思うと、とても嬉しくて涙がこぼれた。

「おじさん。なんで泣いているの？ 大丈夫？」

「いや、嬉しいんだよ。こんな気持ちはいつぶりだろ？ とても嬉しいんだ」

「そうなんだ。おじさんが嬉しくて、私も嬉しいよ！」

彼女は無邪気に僕のまわりを走り回る。いろんな大きさの波紋が、僕の下にまで広がった。

年甲斐もなく、泣いてしまった自分がとても恥ずかしく、頭を手でぬぐつた。

僕の頬から手に零となつて伝う涙は、やがて下に落ちて空に吸い込まれていった。

「でもね。」

「それは唐突に始まった。

「おじさん。私ね、おじさんにひとつだけ言わなくちゃいけないとがあるの」

「ん。なにかな。」

少女は少しだけ微笑む。でも、ちょっとだけ寂しそうだつた。

「ここにはね、あのね、ここには、本当はね。何もないんだつ」

「ど、どういう意味だい？」

「おじさんがね、本当に探しているものは、ここにはないんだつ。あるいはね、ベンチと瓦斯灯、私とギターだけなんだつ」

それは分かっている。でも、僕はそれだけの世界がたまらなく魅力的に思えた。何にもないつてことは、それだけでとても自由なことと思えた。そしてそれは、とても素晴らしいことだ。

「私はおじさんの大切な人だよ？ でもねつ、私じゃない。もちろん、ここにある物たちでもないんだつ」

「私には、探しものなんてないよ。大切なものは全部遠いところへ行つてしまつた。どうしようもないことなんだ、それは。」

「あのねつ、大切なものは遠くへ行つてしまつたけれど、大切なも

のに限りはないんだよつ。だからねつ、別の大切なものを探さなく
ちゃいけないんだよつ」

「別の大切なもの?」

「うんつ。残念だけど、私はここまでだなあ」

少女はうつむいて、私から一歩後ろへ下がつてしまつた。

「おじさん。またきつといつか余えると思うよつ。そしたら、そのときは、私の歌も聴いてねつ！ おじさん知つてた？ 私、昨日の夜、歌つてたんだよつ」

それは、知らなかつた。昨日私が聞いていたのは彼女のギターの旋律だけだつた。

「私の歌が聞こえてないつてことは、おじさんは多分、まだ違うと思つんだつ！ ほら、私、歌つてみるから聴いてみてつ。」

そういうと、彼女はどこから出したのか、昨日弾いていたギターを持ち出す。それは、真つ白なギターだつた。

同じく、白のピックで弦を弾き、彼女は演奏を始める。

彼女は歌つていると言つた。でも、いつまでたつても彼女の歌は聞こえてこなかつた。

「君の歌は、聞こえないよ」

彼女の歌が聞こえないと氣づいたとき、
ここには、本当に何もないんだなあ。と

そう思つた。

彼女がリズムをとりながら踏んでいく畳の床。水がピチョンピチョンと跳ねていた。

そしてそれが、この世界での、僕の最後の記憶だつた。

強い光線を感じて、僕は目を覚ました。ベッドの右の中窓から、太陽の光が入つてくる。寝る前にどうやらカーテンを閉め忘れたらしい。

動物は太陽の光を浴びると自然と起きるよつに、本能で決めら

れているのだそうだ。

憂鬱な朝だ。

今日もまた、代わり映えの無い、きっと辛い一日なのだ。右手には何本も細い傷が走っている。リストカットつづつだ。

昨日つけた新しい傷から血がまだ出ている。ベッドの白いシーツもところどころ朱に染まっていた。

不意に、「おじさんっ！」と声が聞こえる。

そして、いつのまにか、涙が止まらなく、溢れ出していた。

in

F

（後書き）

皆さんははじめて。瓦斯灯と言います。
さて、私事で大変恐縮なのですが、この間、友人のお兄さんに私の
書いた小説を読んでもらいました。

まあ、そこでボロボロに言われてしまったわけで（笑）一言で言え
ば、才能が無いと。

このまま、終るのも悔しいので、お兄さんを見返すために、原稿用
紙10枚と限定して、小説を上げていこうと思います。練習のため
に。

お汚し、醜い点等、多々あると思いますが、なんとか皆様の貴重
な時間を拝借し、読んでいただけたらなあと思います。

厳しい意見、優しい感想など募集しております。
では、これからよろしくお願い致します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2831f/>

Crying Flying Sun Shine

2010年10月15日18時29分発行